
(仮)グラン・ド・ツール

神泉 苑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

(仮) グラン・ド・ツール

【Nコード】

N0931X

【作者名】

神泉 苑

【あらすじ】

平穏な学生生活を送っていた朝比奈紫^{あさひなむかり}の元に一通の手紙が届く。その手紙には差出人の名前が無く、内容は空中庭園への呼び出しだった。紫はそれを気にせず、空中庭園に行った。それが紫の運命を大きく変える出来事になるとは思っていなかった……。

序章（前書き）

新作（仮）グラン・ド・ツール。
途中放棄をしそうですが、頑張ります。

序章

人間と精霊が共存する世界グラン・ド・ツール。その中に国の大半が大自然に囲まれ、精霊王が存在する聖域を多く所有する大国アルフィードルラキ王国である儀式が行われていた。その儀式に数多の精霊と精霊王が協力し、召喚するものを歓迎した。

アルフィードルラキ王国で行われている儀式を視ているもの達がいる。彼らは儀式を視て憐れみの色を浮かべていた。

『可哀想ですね。王妃に気に入られてしまったのが災いして殺されてしまうのですから』

『あの王妃の我儘は度が過ぎますからね。刃向かって皆殺しにされては誰も止められないでしょう』

『だからと言って助けないのは人道に反するわ』

『私達、人ではありません』

『気持ちの問題よ!!』

これから行われる儀式に誰もが口を閉ざす中、三人だけ口を開いた。一人は憐れみ、一人は呆れ、一人は憤っていた。騒ぐ三人を他のものは呆れて見ている。そんな中、表情を変えない二人に問うものがあった。

『いかなさいますか？我らが主よ（ロータス）』
『放っておけ』

ロータス・デユス・ソレイユ

『太陽の主!!!』

ロータス・デユール・リュヌ

『月の主!!!太陽の主を止めてください!!!』

『ここまで来てしまつては俺達に出来ることは何もない。後は運命^{ミツ}に任せた方が危険はないはずだ』

人間が一人、殺されかけているのに動こうとしない太陽の主と月の主に戸惑いを隠せないもの達がいた。世界の秩序を護るのが役目の筈の二人は異世界から召喚される人間を助けようとしな。その姿に疑問を感じるもの達もいた。

『我らが主よ、もしやあの子は……』

『勘が鋭いな。エリオール』

『元はこちらの人間。それが帰ってくるだけだ』

一人があることに気が付いた。二人が何もしないのはグラン・ド・ツールの人間なのではないかと言う疑問だった。その疑問は当たり、二人が何もしないのに納得した。

『我らは静観しよう。あの子の人生はあの子のものだ』

主の言葉に従い、頷くもの達。あの子の運命の歯車は回りだした。

平穩な日常

「紫様――！」
ゆかり

「ごきげんよう、皆様」

聖マリアンヌ女学院に通う朝比奈紫。彼女は聖マリアンヌ女学院の中で最も淑女に相応しいとされ学院内でお姫様扱いをされていた。一つ一つの仕草が洗礼されており、生徒達の憧れの的。紫とお近づきになりたいと思っている生徒達が紫の回りに集まっていた。紫はその生徒達を邪険にせず、皆と話していた。名を呼べば振り向いて笑顔で応えてくれる紫に皆好感を持っている者が多い。学院の全生徒が紫の信者といっても良いほどに。

「？何かしら？」

紫の机から一通の手紙が出てきた。紫は不思議そうに手紙を見ながら封を切る。

「放課後、空中庭園でお待ちしております。……？……いけばわかるかしら？」

手紙には送り主の名前など無く、紫は内容を深く考えずに放課後空中庭と呼ばれるバラ園に行った。バラ園の中心部には池があり、バラ園全体に水を流していた。その池の近くで紫は待っていた。

「少し早かったかしら？」

バラ園を見渡して呟いた紫。誰の気配も感じないバラ園には紫一人。気長に待つことにした紫が池に視線を向けた瞬間、ドン、と背中を

押された。

「!」

そのまま池に落ちた紫は水面上がろうと必死にもがくが制服が重く上がる事が出来ない。息が続かなくなった紫は限界に達し意識を無くした。それと同時に紫を淡い光が包み込み消えた。

召喚

薄暗い神殿の一室でローブを被った数人の人間が集まっていた。人間達は何かを紡ぎ集中していた。すると、淡い光が集まり始めた。淡い光は徐々に大きな光となり人形になった。人間達はそれを見ても呟く事を止めない。光が完全な人形になると光は弾け紫が現れた。

「王子」

「ああ。皆、ご苦労だった。当分の間は養生してくれ」

王子と呼ばれた人物シエラレオネが紫を抱き上げ、他の者達を労ってから部屋を出ていった。その後を王子と呼んだ人物シュトラージェが付いて出ていった。残された者達は疲労で動けず座り込んでいた。

目覚めを待つ王子

シエラレオネは神殿から出るとすぐに城に移動した。すれ違う使用人や兵士達に軽く挨拶をして寝室に向かう。しかし、その足取りは寝室ではなく浴室に向かっていた。それに気が付いたシュトラージェが慌てて止めた。

「シエラ様！どこに向かおうとしているのですか！？」

「……………我が妻はさぶ濡れだ。風呂に入れなくては風邪を引いてしまう」

「それはわかりますが、シエラ様が向かわれる意味がわからないのですか？」

「私が入れるだけだ」

変態への道を歩もうとするシエラレオネをシュトラージェが引き留めた。まだ目覚めてもない紫に誤解を植え付ける訳にはいかない。真顔で入れると言ってしまったている辺り本心からであるのはシュトラージェも理解できた。しかし、それだけはまだ越えてはいけない境界線だ。シュトラージェがどう止めようか悩んでいると前から見知ったメイドがやって来た。シュトラージェはそのメイドに命じた。

「アンジェリカ！！奥方様をお風呂にいれて差し上げなさい」

「畏まりました」

「あー！！待て！アンジェリカ！！」

「はいはい、シエラ様はこちらですよ」

見知ったメイドアンジェリカはシュトラージェの命に素早く動きシエラレオネから紫を奪い逃げた。その素早さに遅れをとったシエラレオネが追いかけようとするがシュトラージェに捕まってしまった。ズ

ルズルと引きずられてアンジェリカとは反対の方面に連れていかれた。

紫はアンジェリカと他のメイド達により綺麗にされ、シエラレオネの寝室へと運ばれた。それでも一向に起きる気配のない紫をシエラレオネは心配していた。そわそわした様子で執務室を動き回るシエラレオネにシュトラーゼがため息をついた。

「シエラ様、少しは落ち着かれてはいかがですか？」

「だが！」

「心配なのはわかりますが、仕事をしてください。奥方様がお目覚めになられた時、執務室が汚れていたら失望なされますよ」

「仕事を持ってこい、シュトラーゼ」

仕事が手につかないシエラレオネを諷めるシュトラーゼ。紫が失望するしない以前の問題でもあるが、シエラレオネはそれに気付かずシュトラーゼの言葉に乗せられて仕事を片付ける。

（奥方様を出せば仕事を…と）

シュトラーゼは脳内メモに付け加えた。今後、仕事をしなければこの手を使えば効果的だとほくそえんだ。

紫は夢を見た。暖かい水に包まれる夢を。その水は羊水の様に幸せに満ち足りていた。体を動かすことも喋ることも出来ないが喋る声は聞こえる。何かを歓迎していて楽しみにしている声と優しく響く母の様な声。紫はその声の主と会うのが楽しみだった。しかし、水が急激に流れ始めた。紫はなす統べなく流れに身を任せ、意識を闇に沈めた。

シエラレオネが全ての仕事を終わらせたのは夜だった。シュトラゼの言葉に乗せられたのを反省しつつ、寝室に戻る。寝室には未だに目を冷まさぬ紫がベッドに横たわっていた。シエラレオネは起こさぬように横に寝転がると紫の額にキスをしてから眠りについた。

紫は暖かい何かに包まれたことにより意識を戻した。

「……………」

体は動かないが瞼を開けることは出来た。長い間瞳を閉じていたことで瞳に物が映し出されるまで時間はかかったが、それでも暗かった。体を動かそうにも動かす事が出来ない。覚醒しきれていない頭で考えることを放棄した紫はまた意識を闇に沈めた。

壊された日常

翌日、シエラレオネが目を覚ましても紫は起きていなかった。正確には起きたがまた眠っただけだ。

「…早く目覚めて私にお前を感じさせてくれ…我が妻よ」

シエラレオネが紫の顔を撫でながら呟いた。すると、紫が目覚めた。焦点の定まっていない瞳だったが暖かみを感じる方に紫は視線を向けた。それにシエラレオネは驚いて優しい笑みを浮かべた。

「おはよう」

「……………」

シエラレオネが声をかけても紫は反応しない。シエラレオネは首をかしげた。

「おはよう？」

「……………」

全く反応しない紫にシエラレオネは首を更に傾げる。一方の紫は頭が完全覚醒して思考も動き始めたが目の前にいるシエラレオネの言っていることが理解できない。なんて反応したら良いのか悩んでいた。

「言葉が通じてないのか？」

ブツブツと呟き始めたシエラレオネを横目に紫は起き上がるうとした。だが、それに気が付いたシエラレオネに制された。

「まだ起き上がってはダメだ」

余り力が入らない紫はシエラレオネのなすがまま横にされた。

「シュトラーゼを呼ぶしかないか……」

ため息をついて何かを決意したシエラレオネを不思議そうに見る紫。そんな紫の頭を優しく撫でるシエラレオネ。

『あの……』

「……………」

紫が声を発した。しかし、その声は言葉になっていなかった。シエラレオネは紫の声に驚きついつい紫を見つめてしまった。それに紫は居心地が悪そうに顔をしかめ、そっぽをむいた。機嫌を損ねたのかと勘違いしたシエラレオネが慌てて弁解した。

『ごめんね！怒らせたかった訳じゃないんだ！！だから、こっち向いて？』

『……ふふ』

シエラレオネの慌てっぷりが紫の笑いを誘ったらしい。笑う紫を見てシエラレオネは安堵の息を漏らした。

『あの……』

『どうかした？』

『ここはどこですか？』

『ここはアルフィードルラキ王国。グラン・ド・ツールにある大國だよ』

紫の問いにシエラレオネが嬉しそうに答える。しかし、紫は聞き慣れない言葉に首を傾げた。

『グラ……？』

『グラン・ド・ツールだよ』

『グラン・ド・ツール』

『そう。で、この国はアルフィードルラキ』

『アルフィードルラキ』

『そうだよ』

幼子に言葉を教えるようにシエラレオネがゆっくり言葉を紡ぐと紫が復唱する。紫がちゃんと言えるとシエラレオネは紫の頭を撫でる。このとても穏やかで幸せな時間を壊す奴がノックしてやって来た。

「いつまで寝ているんですか？起きてください。シエラ様」

「……………空気を読まない奴め……………」

「シエラ様」

紫は知らぬ声に驚くがシエラレオネが落ち着かせる。今も扉の向こうで扉を叩くシュトラーゼ。紫の為にも黙らせたいシエラレオネは仕方なくシュトラーゼの入室を許可した。

「入れ」

「失礼します。起きてるなら起きてると……………目を覚まされたのですね」

入室許可が下りたシュトラーゼがはいつて文句を言っていたが紫が起きているのを見留め驚いた表情をした。

「お体は大丈夫ですか？奥方様」
「？」

シュトラージェの言葉に困ったような表情をする紫。シエラレオネが助け船をだした。

「シュトラージェ、精霊語で話しかけてやれ。共通語は通じない」
「……わかりました」

シエラレオネの言葉にシュトラージェは驚いた表情をして頷いた。今まで紫とシエラレオネが話していたのは精霊が使う言葉だった。精霊語は神官や精霊憑きなど限られた人間が使う言葉だ。一般の人間には何を言っているのかわからないだろう。シュトラージェは紫に精霊語で話し掛けた。

「お体は大丈夫ですか？奥方様」

「奥方様……？」

「はい。貴女はシエラレオネ様の奥方様です」

シュトラージェが紫に話しかける。紫はシュトラージェの言葉に首を傾げた。シュトラージェは優しい笑みを浮かべ頷いた。でも紫の疑問は増えるばかりだった。

「？シエラレオネ様とはどなた様ですか？」

「……シエラ様……」

「すまない……目覚めたことに浮かれていた」

紫の疑問にシュトラージェはシエラレオネを白い目で見た。いたたまれなくなったシエラレオネはそっぽを向く。それにため息をついたシュトラージェ。

『この方がシエラレオネ様です。私はシュトラージェと申します。貴女のお名前をお聞きしてもよろしいですか?』

『私の名前……?……』

『? いかがい었습니다か?』

『……… わからない……』

『え?』

シュトラージェがシエラレオネを紹介して紫に名を聞くと紫は考え込んでしまった。紫の記憶が曖昧なのだ。それに驚くシュトラージェとシエラレオネ。

『わからないの』

『………』

『そんな不安そうな顔をするな。名が無くとも我が妻であることにかわりない』

不安そうな表情をする紫をシエラレオネが安心させるために頭を撫でる。すると、精霊がやってきた。

『ユカリ! ユカリ!! ママンの娘!! ママン喜んでた!! ユカリが生まれて喜んでた!!』

『マ、マ、ン?』

『ママン! ママン! ボクたちのママン!!』

『!?!?』

『アハハ!! ユカリまたね!!』

陽気な精霊は紫の周りを回りながら踊っていた。紫が名を繰り返すと精霊も復唱する。シエラレオネとシュトラージェはある言葉に反応した。精霊は満足したのか何処かに消えていった。

「……シエラ様、凄い方を奥方様にしましたね」

「……そうだな」

「精霊の王女ですか……」

共通語で会話するシエラレオネとシュトラージェに紫は首を傾げた。
それと同時に紫はあることを思い出す。

『……朝比奈紫……』

「え？」

『それが奥方様の名前ですか？』

『……違う！！ここは私のいた世界じゃない！！』

紫の言葉にシエラレオネとシュトラージェは驚いた。

（奥方様のいた世界じゃない？しかし、あの魔方阵は運命の相手と呼ばい寄せるもの。異なる世界から召喚されるなど……ありえない）
（ユカリのいた世界か……興味あるな）

シュトラージェは魔方阵について思考し、シエラレオネは愚考していた。

『どうして……？あの時、私は確かに池に落ちたわ。死んでるはずなのに……それとも死後の世界……？』

『それはない』

『それだけはありません』

動揺する紫の言葉にシエラレオネとシュトラージェが突っ込んだ。徐々に記憶が甦ってきた紫は更に動揺する。その様子にシエラレオネが動いた。

『ユカリ』

『？』

『初めにユカリはどこにいた？』

『学校にいました。夕方、手紙を貰って空中庭園に行きましたの』

シエラレオネが紫を呼ぶ。それに反応して紫が顔を上げた。シエラレオネの質問と言う名の誘導に紫は答えていく。

『それから？』

『空中庭園にある池の近くにいました。誰もいなかったから池を見ていたら後ろから突き飛ばされて落ちてしまって……必死に水面にでようとしたけど息が続かなくて……それからわかりません……』

続きを促されるまま答える紫。長い間忘れていたように感じられる記憶を引きずり出す紫。

『他には？』

『後は……暖かい何かに包まれたのは覚えています。暖かい声が聞こえたのも……』

『ユカリ、悩む必要はない。もしそれが本当なら精霊に聞けばいい。先程来た精霊がいただろう？精霊達はそこら中に存在する。だから、聞けばいい。答えてくれるはずだ』

『はい……』

段々落ち込んでいく紫をシエラレオネが元気づける。精霊は滅多なことでは姿を現さないが精霊に気に入られれば近寄ってくる。紫の頭を撫でるシエラレオネ。落ち着きを取り戻した紫はシエラレオネの言うことに従った。

『ユカリ、お前がここににいる理由を話さなくてはならないね。ユカリを呼んだのは私だ』

『え？』

紫はシエラレオネが紫がいる理由を知っているのに驚いた。紫はシエラレオネが知るはずがないと思っていたのだ。

『この国では王族は１８の誕生日に必ず運命の相手を召喚しなくてはならない。だが、今まで召喚された相手はアルフィードルキの国民だった。だから、今回ユカリが異世界から来たのは私でも驚いた』

『…じゃあ、帰れないの…？』

『すまない』

『そんな……』

シエラレオネが紫に真実を話して頭を下げた。それに紫は驚いた。二度ともこの世界に帰れないのだと絶望した。

『ユカリ、ユカリが帰りたいのなら私も帰る方法を探す。でも……』

私はユカリと一緒に居たい。ユカリだけが私の奥さんなんだ』

『………』

落ち込む紫を何とか励まそうとするシエラレオネだが紫は聞いていない。それを見てシュトラークが助け船を出した。

『ユカリ様、精霊の女王を探しましょう。精霊の女王なら帰る方法をご存じかも知れません。その為にシエラレオネ様の奥方様と言う地位を利用しましょう？』

『……でも……』

『構わない。この国には聖域が多い。聖域にはたくさん精霊がいる。聖域に入るには王族であることが条件だ。精霊の女王を探すなら我が妻の地位にいるほうが探しやすいだろ』

シュトラージェの言葉に難色を示す紫。頷かせる為にシエラレオネが利点を説明する。それでも紫は難色を示したままだ。

『……ですが、シエラレオネ様には何も利益はありません』

『そんなことはない。我が妻となる以上、義務は果たしてもらわねばならない』

『義務？』

『パーティーに出席したり、シエラレオネ様に付いて視察に行ったりです。他にも有りますが、今はこれくらいでしょう』

『ユカリは我が妻としての役目を果たしつつ精霊の女王を探し、私は精霊の女王探しの手伝いをする。これでどうだ？』

『……わかりました。ここで頼れるのはシエラレオネ様方しかいません。よろしくお願いします』

『ああ』

等価交換。紫が難色を示していた理由はこれだった。紫に利益はあってもシエラレオネ達には利益がないと紫は言ったのだ。それを理解したシエラレオネとシュトラージェが首を横に振った。出された条件によろしく頷いて頭を下げた紫。シエラレオネは安心したように笑みを浮かべた。

新たに始まる生活

『では、今、メイドをお呼びしますね』

「アンジェリカ、入りなさい」

「失礼します」

シュトラーゼは外で待機させていたメイドを呼んだ。シュトラーゼに呼ばれて入ってきたのはアンジェリカだった。アンジェリカは入り口で待機して指示を待った。シュトラーゼは手招きしてアンジェリカをベッドの近くまで呼んだ。

『こちらはユカリ様のお世話をさせていただくアンジェリカです。』

アンジェリカ、シエラレオネ様の奥方様となるユカリ様です』

『アンジェリカさん、よろしくお願いします』

『ユカリ様、私はユカリ様の侍女にございます。どうか、アンジュとお呼びください』

『アンジュさん？』

『呼び捨てで構いません』

『でも……』

『構いません』

『ハイ……』

アンジェリカは紫に対して王族にする最高礼をする。紫は起き上がる事をシエラレオネから許されておらず頭を下げることしか出来ない。さん付けする紫をたしめる。王族の一員となるのだから侍女をさん付けで呼ぶ必要はないと。アンジェリカの有無を言わさぬ笑みに頷くしか紫には出来なかった。

「シエラ様、シュトラーゼ様、即刻出ていってくださいませ」

「ここは私の部屋だ」

「ユカリ様の着替えを見るおつもりですか？」

「夫婦になるのだ。構わないだろ」

「乙女心を理解なさってください。シエラ様は隣の衣装室で着替えをなさってください」

アンジェリカは紫を着替えさせるためにシエラレオネとシュトラーゼを追い出そうとする。シュトラーゼは肩を竦めてシエラレオネはアンジェリカと対峙する。両者一步も譲らず……。シエラレオネがチラッと紫を見て今回は引いたのだった。

「……わかった。睨むな、アンジェリカ」

「ユカリ、着替えたらまた来るからね。何かあったら叫ぶんだよ」

「ユカリ様、また後程お会いしましょう」

「？」

紫に話を聞かせないためにあえて共通語で話すシエラレオネとアンジェリカ。紫は二人が何を話していたのかわからず首を傾げた。シエラレオネは紫に微笑んで頭を撫でてから隣の衣装室に入っていた。シュトラーゼは紫に挨拶してから普通に扉から出ていった。

「さ、ユカリ様。お着替えしましょう」

「え……」

アンジェリカの綺麗な笑みに本能的に恐怖を感じた紫。この後、アンジェリカの着せ替え人形になるのだった。

着替え終わり待ちばうけを食らっていたシエラレオネが痺れを切らし寝室に突撃した。すると寝室には疲れきってぐったりとした紫がソファに横たわっていた。アンジェリカは上機嫌でベッドメイキング中。シエラレオネは慌てて紫に駆け寄った。

「ユカリ、大丈夫？」

「……うう……もうダメ……」

「ユカリ……」

シエラレオネが話し掛けても魔されている紫。それが心苦しいシエラレオネはアンジェリカを睨み付けた。

「アンジェリカ」

「何ですか？シエラ様」

シエラレオネの殺気に動じないアンジェリカ。シエラレオネとアンジェリカの戦いが火蓋を切った。

「ユカリに何をした」

「ユカリ様のお洋服を選んでいただけですわ。シエラ様が思われているような事はございませんでしたか？ユカリ様ってばスタイルが良いのでどれも似合って迷ってしまいましたわ」

「ッ……」

シエラレオネの言葉にアンジェリカは意気揚々と告げた。言葉に詰まるシエラレオネをニヤリ顔で見るアンジェリカ。アンジェリカが優勢なようだ。

「将来は美人になって殿方からのお誘いが星の数ほどありましょう」

「ユカリは俺のだ……。絶対に渡さん」
「まあ、怖い」

シエラレオネを更に追い詰めるアンジェリカは鬼だ。完全に目が据わるシエラレオネを笑うアンジェリカ。今回の勝負はアンジェリカに軍配が上がった。アンジェリカとシエラレオネの戦いが繰り広げられている最中、紫は未だに魘されていた。ある意味、カオスと化している寢室にシュトラージが入ってきた。ノックはしたが誰も何も言わないので勝手に入ってきた。

「…何をしているのですか？」

アンジェリカとシエラレオネの睨み合いと魘されている紫を見てシュトラージはため息をついた。シュトラージの問いに誰も答えないシエラレオネとアンジェリカはシュトラージが来たことにすら気が付いていないようだ。シュトラージは紫に近付いて容態を確認する。

「ユカリ様、大丈夫ですか？」

「うう……」

「ユカリ様、ご安心を。人形遊びは終わりました」

「……本当……？」

「はい」

「…もう……いや……」

「明日以降はすぐに決めるようアンジェリカに言っておきます」

心身共にダメージを負った紫に紫の気持ちを察したシュトラージが真顔で誓った。これは可哀想だとシュトラージも判断した。

「ユカリ様、少しお体に触れさせて頂きますね」

「？はい」

まだ体が動かない紫をシュトラーゼが起こして持ってきた車椅子に紫を座らせた。

『！車椅子ですか？』

『はい。何処かに仕舞っていたのを思い出しましてお持ちしました。膝掛けをお掛けしますね』

『ありがとうございます。シュトラーゼ様』

シュトラーゼが紫の体調を気遣って冷えぬように膝掛けをかけた。それが嬉しかった紫は素直にお礼を言う。

王の呼び出し

『起きられたばかりで申し訳ございません。王が……シエラレオネ様の父王君がユカリ様にお会いしたいと申しておりました』

『え……』

『ですが、ユカリ様が異世界より参られた事は混乱を避けるため伏せておかねばなりません。そこで一つ、私が手を打ちました』
『父がお呼びとは厄介な……』

シュトラーゼは申し訳ない顔をして紫に王が呼んでいると告げた。それに動揺する紫。シエラレオネが召喚した嫁に興味を持ち、話が来たようだ。いつの間にか睨み合いを終らせ、話に加わってきたシエラレオネとアンジェリカも顔をしかめた。シュトラーゼはシエラレオネとアンジェリカの身代わりの早さに顔をひきつらせた。

『……ユカリ様は私の叔父の娘と偽らせて頂きます』

『叔父様……ですか？』

『はい。叔父は十五年に他界しています。ユカリ様は見たところ十五、六くらいでしょう。年齢に問題はありません。それにユカリ様は叔父と同じ髪色をしているのでバレません。叔父は未婚でしたが、水の女王と親しいので母親はユカリ様を産んだ直後に亡くなられ、叔父はユカリ様を水の女王に預けられた……と、言うことにしておけば精霊語しか話せなくても問題はありません』

気を取り直してシュトラーゼが策を告げる。叔父が水の精霊女王と仲が良かったことを利用した策だった。紫が精霊語しか話せない理由にするには最適だった。ただ紫自身が精霊語を理解していなかった。

『精霊語？』

『ユカリ様がお話されている言語のことです』

『え？日本語では無いんですか？』

『？……これもユカリ様の異世界渡りに関係があるかもしれませんね。水の精霊女王なら何かわかるかもしれませんが。仮にも精霊王のお一人。いきなり召喚された事を理由に水の聖域に行くことができますはずです。水の女王には話を通してあります。面白がっていましたから協力は惜しまないはずです』

紫の質問にシュトラゼやシエラレオネ、アンジェリカが首を傾げた。そして、ある答えをシュトラゼが導き出す。その策に穴は無い。もちろん、叔父と紫の年齢もおかしくはない。ただ、嘘だと見破られてしまわないかが最大の問題点だった。

『ユカリ様、王と謁見するにあたりご注意があります。王族や貴族の殆どは精霊語がわかりません。ただし、王族には必ず神官が付きます』

『神官？』

『はい。神官とは精霊と対話できる者を指します。私も大神官で精霊王と対話することが許された者です。その者達は精霊語を理解できます。ユカリ様の言語が王しか使わぬものでも前後の言葉で理解できます。気を付けてください。不用意に言葉をもらせばユカリ様の命が狙われます。今の王宮は王位を狙う者達が大勢います。ユカリ様が無害である事がわかれば手を出すことはないでしょう』

『……………』

シュトラゼが注意事項を紫に説明する。シエラレオネやアンジェリカも頷いていた。今まで紫はあることに気が付いていなかった。

『王宮？シエラレオネ様は王族？』

『ああ。私は第十八王子だ』
『十八！？』

普通に出されたワンフレーズに紫は驚いた。シエラレオネの順位にも驚いていた。色々な考えが紫の頭を駆け巡った。
(幾つの時に王位に就いたの！？)
等である。驚く紫にシエラレオネが首を傾げた。

『驚くことか？』

『驚きますよ！！頑張りすぎです！！』

アルフィードルラキでは王族の数が異様に多い。昔からの伝統の様なものだった。そのせいかシエラレオネやシュトラーク、アンジェリカにはわからない感覚だった。

『そう言うな。私は五番目の王妃の子供だ。父は今までに四人の王妃を亡くしている』

『亡くしている？』

『ああ。亡くしている』

『……そうですか』

子供だけの数を見れば確かに多いが一人が産んだ人数ではないとシエラレオネが言う。紫からしてみればそれでも数は多い。シエラレオネの言葉の裏に隠された真実を紫は垣間見た気がした。深く関わるのはよくないと紫は話を流すのだった。

『今の王宮についてザックリ説明するぞ。兄弟は私を含め30人』

『30！？王様幾つですか！？』

『今年で60だ』

『60！？』

『父は12で王位に就いてすぐに子をもうけた。正妃の他に愛人もいて毎年誰かしらを孕ませていた。一番下の弟は生まれたばかりだ』
『生まれたばかり……』

紫が思っている王族とはスケールが違った。規格外も良いところだ。紫はシエラレオネの話を聞いてドン引きした。

『最近になって父が次期王を選出すると言い出して兄弟達が躍起になっている。邪魔な他の兄弟達を殺して自分が王位に就こうと暗躍している。ただ王になるためには条件があつて妻や夫がいることが条件となっている。妻や夫がいない者は王としての役目を果たすことが出来ないからな』

『どうしてですか？』

『王の責務に次代を作ることが課せられている。つまり、子供を作れない王は必要無いと言うことだ。それでも王位に執着するものもいる。それらは兄弟全員を皆殺しにしても王位に就こうとするだろっ』

『……』

シエラレオネの語る王族の姿に紫は悲しい顔をする。私利私欲の為に兄弟を殺そうとする心理を理解できず、肉親を殺される虚しさを知らない彼らが紫には悲しかった。

『そんな顔をするな。ユカリは必ず私が守る』

『………はい………』

シエラレオネは紫を優しく抱き締めるが紫の心を理解していなかった。それでも紫はシエラレオネの優しさを無駄にさせない為に頷くのだった。

『謁見には王族全員が出席なさるはずです。ユカリ様に対する質問はシエラレオネ様が全て答えますので、ユカリ様はいるだけで結構です。何か聞かれてもシエラレオネ様を返してお聞きますので答えにくいものはさらっと流してくださいださって構いません』

『…わかりました』

シュトラーゼの言葉に頷く紫。それを見てシュトラーゼも満足そうに頷いた。

『では、シエラレオネ様。参りましょう』

『ああ』

『いつてらっしゃいませ』

シエラレオネが紫の車椅子を押して部屋を出た。シュトラーゼはその後を付いていく。アンジェリカはシエラレオネ達を見送り部屋に残った。

波乱の謁見

城の長い廊下を延々と歩き、辿り着いた巨大な扉。扉の前に待機する兵士達がシエラレオネを見て扉を開けた。

「シエラレオネ様、シュトラージェ様、奥方様、ご入場!!」

謁見の間には大勢の王族が並んでいた。正面に王と王妃が座り、両端に兄弟が並ぶ。兄弟達の視線は悪意の込もっているものが多かった。紫はその視線に怯む。シエラレオネは怯える紫に気が付いて声をかけた。

『大丈夫?』

『は、はい……』

顔を青くする紫にシエラレオネは顔を曇らせる。しかし、今はどうにも出来ないので黙ったまま跪いた。シュトラージェも二人の後ろで跪いた。

「シエラレオネ、その者がお前が召喚した者か?」

「はい。シュトラージェ立ち会いの元、三日間に渡る儀式で召喚致しました」

「では、その姿はどうした?」

王がシエラレオネに問いかける。すると、王族の視線が紫に向けられ皆驚いた顔をする。シエラレオネは王に淡々と詳細を報告した。

「召喚に伴うリスクで一時的に体が動かなくなったものと思われま

す」

「精霊付きであるお前がこれか……」

「恐れながら陛下。召喚には多大なリスクが伴います。生きて召喚されただけでも良しとすべきです。正妃の二の舞にならなくて良かったと思いますよ」

「……………そうだな」

シエラレオネが紫の動かない体について説明すると王は落胆した。しかし、シエラレオネが王の正妃の話を出すと王は顔をしかめて頷いた。

「シエラ、彼女のお名前は？」

「ユカリと申します」

「そう、ユカリ。貴女は何が得意かしら？」

王妃がシエラレオネから紫の名前を聞き出し、紫に問う。しかし、紫は反応を示さない。それに王族が響めく。

「恐れながら、王妃様。ユカリは共通語が話せません」

「どう言うことだ？シエラレオネ」

「ユカリは精霊王により育てられたため、精霊語しか理解出来ないのです。しかし、精霊語と言っても精霊王が使う精霊語です。お聞きしたいことがあれば私がお聞きしますが？」

「なんと！？誰が育てた？」

「水の精霊女王ハスワール様でございます」

シエラレオネが理由を説明すると王妃は驚き、王は顔をしかめた。精霊王と言われ興味を示した王はシエラレオネの言葉を無視して誰が育てかを聞き出した。

「水の精霊女王か……。シュトラージェ、何か聞いておらぬか？」

「どうやらユカリ様はグリモア様から頼まれたご様子です」

「グリモアとは確か、シュトラージの叔父だったな」

「はい。我が一族で最もハスワール様の寵愛を受けていた大神官です」

「うむ……この場で精霊王の精霊語を理解できるのはアキラしかおらぬか……。アキラ、何か聞いてみよ」
「はっ」

シエラレオネを無視してシュトラージから話を聞き出す王。シエラレオネもいつもの事と無視を決め込み、シュトラージに説明するよう視線を投げた。シュトラージは心得たように説明する。王の記憶の片隅にシュトラージの叔父が残っていたのは予想外だったシュトラージとシエラレオネだが深く聞かれなかったことに感謝した。王は精霊語を話せるシエラレオネの兄アキラに話を振った。アキラは礼をしてから紫に近づいた。

「初めまして、ユカリ。私は第十三王子、アキラと言う。よろしくな」

「初めまして、アキラ様。紫と申します」

「変な事を聞いて良いか？」

「なんですか？」

「お前に……あさひなあき朝比奈麗と言う叔父はいたか？」

「……はい。おりました。私が十になる年に亡くなられた叔父が」
「……そうか」

アキラと紫が誰にも理解できない精霊王同士で使う精霊語で会話を始めた。シエラレオネでも何を話しているのか理解できない。しかし、二人の表情は穏やかでそれを見破れるものはいない。アキラの質問に対して紫の答えがアキラにとって納得のいくものだったらしい。笑ってから精霊王が普段使う言葉に戻した。

『ユカリ、スリーサイズ教える』

『兄上ー！！！！！！！！』

『落ち着いて下さい！！シエラレオネ様！！』

真面目な顔で変態極まりない言葉を言ったアキラにシエラレオネが激怒。帯刀していた剣を抜刀しようとするシエラレオネをシュトラーゼが羽交い締めにして押さえた。

『シエラ……別にかまわぬだろう。減るものでもない』

『減ります！！ユカリの全てが減ります！！』

『わめくな、シエラ。男ならドシツと構えている』

『それとこれとは話が別です！！』

『嫉妬は醜いぞ、シエラ』

『誰がそうさせているのですか！！』

アキラがシエラレオネをおちよくって遊ぶ。アキラは真顔でシエラレオネは鬼の形相。この光景に神官達も含め、驚いている。シエラレオネは誰に対しても感情をむき出しにすることがなかった。それが召喚した紫に対して独占欲を出しているのに驚きを隠せなかった。

『シエラレオネ様、落ち着いて下さい。私は大丈夫ですわ。高々、スリーサイズくらいでその様にお怒りにならないで下さい』

『ユカリ……私が許せないのだ』

『シエラレオネ様……。アキラ様、シエラレオネ様をからかうのは程ほどにしてくださいませ』

紫がシエラレオネを止めようとするが、シエラレオネは怒りをおさめる気がない。それを見て紫がアキラを止めるがアキラは笑っていた。

『ごめんごめん。シエラをからかうの楽しいんだよ』

『アキラ様』

『はい。…あ、そっか。シエラからいらぬとばっちりを受けたら大変だもんね』

『何を指しているのかわかりませんが、下らない事なのはわかりました』

アキラもアキラで馬鹿な事を考えているのがわかった紫。何を言っても無駄だと紫は判断した。

『ユカリ様！！諦めないで下さい！！』

『私では駄目ですわ』

『ほら、シエラレオネ様！！王の御前です！！しつかりなさい！！』
『！！』

諦める紫をシュトラーゼがたしなめるが完全に諦めモードの紫。最後手段でシュトラーゼはシエラレオネを諷めた。シュトラーゼの言葉にシエラレオネとアキラはハッと我に返った。

『……忘れてた……』

『……アキラ様……』

精霊王の精霊語で呟くアキラに紫はため息をついた。

「お見苦しいところをお見せしました」

「何があつたかはわからぬが良い」

シエラレオネとアキラが王に頭を下げた。それを適当にあしらう王。すると、王妃が口を開いた。

「ユカリとお話が出来ないのは残念ですが、これでシエラも王位継承者になれましたね」

「……そうですね。私は王位に就くつもりはございませんが」

王妃はにつこりと笑顔でシエラレオネに告げた。シエラレオネは沈黙後、首を横に振るが王妃は驚いたように口許に手を当てる。シエラレオネはその仕草で王妃が何を考えているのかを見抜いた。

「まあ、私はシエラレオネに就いて戴きたいのだけど？」

「王妃様、私は王位に就けるほどの技量を持ち合わせていません。それは兄上や姉上方が即位すれば良いこと。私は辺境の城で平和に過ごしたいと思っています」

「そうですね。シエラレオネがそう言うなら仕方ありませんね」

「お分かりいただけたようで何よりです」

表面上は王妃がシエラレオネの考えに理解を示し考えを改めた。しかし、水面下では王族の黒い闇が蠢いていた。

「なんで母上はそんなやつを即位させたいんですか！？僕だって良いじゃないですか！！」

「ラクレイア。貴方は着飾る事だけしか興味がないではありませんか。その様な者が王になるなど考えられません」

王妃とシエラレオネの笑顔の圧力戦に水を差したのは第十六王子ラクレイアだった。ラクレイアは派手好きで自己中心的で短気。思い通りにならなかったら癪癪を起こす。これでは政治など出来やしない。王妃としては兄弟の中で一番優秀なシエラレオネに頼みたいと言う建前を利用してラクレイアを切り捨てた。それにシヨックを受けたラクレイアはシエラレオネに責任転嫁をした。

「！！お前のせいだ！！」

「言いがかりなど見苦しいですよ。ラクレイア兄上」

怒りの矛先をシエラレオネに向けたラクレイア。しかし、シエラレオネは火に油を注いだ。シエラレオネの言葉に更に逆上したラクレイアがシエラレオネではなく紫に剣を向けた。

「！！殺してやる！！」

「！？ゼクセファルト！！」

紫は体の自由が効かず動けない。ラクレイアは紫に剣を振りかざす。シエラレオネは紫を護るため、自分が所有する精霊ゼクセファルトを喚んだ。

「ぐあ！！」

喚ばれた精霊ゼクセファルトはラクレイアの頭上から現れ、ラクレイアを踏みつけた。それに全員が沈黙した。シエラレオネが顔をひきつけてゼクセファルトを止めた。

『ゼクセファルト、殺すなよ』

『……………』

『ゼクセファルト』

『……………』

シエラレオネの言葉に無反応なゼクセファルト。その下ではラクレイアを思いつきり踏みつけていた。遠慮なく全体重をかけていた。シエラレオネの鋭い声も無視。

『ゼクセファルト、お退きなさい』
『姫のご命令ならば』

紫がゼクセファルトに告げるとゼクセファルトは微笑んでから退いた。その光景に誰もが驚いた。ラクレイアは待機していた兵士に医務室へ運ばれて行った。

『ゼクセファルト、お前私に従わないのにユカリには従うんだな』
『お前と姫が同列だと？ハッ！！肩はわきまえよ。生きている事に感謝をし、我に跪くがよい』

『この女王め』
『最高の誉め言葉だな』

険しい顔をしてゼクセファルト専用の精霊語で対話するシエラレオネ。シエラレオネの言葉に鼻で笑い見下すゼクセファルト。顔をしかめるシエラレオネに勝ち誇った顔をした。

『姫、姫にアルシエルドをお渡ししましょう。この子は必ずや姫の役に立ちましょう』

『私に預けていいの？』
『もちろんです。この子は姫の為に生まれたのです』

ゼクセファルトは紫に精霊アルシエルドを渡した。アルシエルドは体長10cmくらいで喋ることは出来ない。紫の掌でぺこりと頭を下げるアルシエルド。

（か、可愛い……！）
紫はアルシエルドの可愛さに魅了された。

『アルシエルド、必ず姫を肩共から守るのですよ』

ゼクセファルトの言葉に頷いてガッツポーズをアルシエルド。それを見たゼクセファルトは満足そうに頷いた。

『シエラレオネよ、姫を傷付ける事は決して許さぬ。覚えておくがよい。姫を傷付けるものは容赦無くアルシエルドが殺すであろう』

ゼクセファルトは謁見の間にいる全員に殺気に向けて告げる。それに怯える王族。ゼクセファルトの後ろ姿しか見えない紫は何が起こっているのかわかっていない。ゼクセファルトは紫を振り返り微笑んでから消えた。

「……あれがシエラレオネの精霊か……」

「…普段は大人しいのですが、機嫌が悪いととても攻撃的です。今回はちよつとご機嫌斜めでしたね」

王の呟きにシエラレオネが答えると全員が怒りを露にした。王がシエラレオネに怒鳴り付ける。

「あれでちよつとだと!？」

「ゼクセファルトの機嫌が悪かったら、私を含め皆殺しです。ゼクセファルトは超古代文明ナスカレーシュを滅ぼした破壊の精霊です。この意味がお分かりですか？」

「!?!」

「ッ……」

王の怒鳴り声にシエラレオネは見下した視線をやり告げる。ゼクセファルトが大昔、グラン・ド・ツールに栄えて超古代文明ナスカレーシュを一瞬にして滅ぼした精霊だと知ると皆、息を飲む。呼び出されたゼクセファルトの機嫌が悪かったら、ラクレイアどころか自分達も殺されていたかも知れないと言う事実に関心を青くする王族。

他人よりも自分の身を第一に考えていた。そんな王族を見ていたシエラレオネの視線が鋭くなった。

「陛下、ユカリに何かした場合、ゼクセファルトが我々に制裁を下すでしょう。それをお忘れなきように。では、私たちは失礼いたします」

シエラレオネの言葉に顔を青くして頷く王を確認してシエラレオネは紫の車椅子を押して謁見の間を後にした。シュトラーゼもその後を追うように出ていった。紫は話の大半を理解できていないが、後で聞けばいいかと深く考えていなかった。

シエラレオネの寝室に戻るまで誰一人として喋らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0931x/>

(仮)グラン・ド・ツール

2011年10月10日01時40分発行